
同居人の話

千葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同居人の話

【Nコード】

N4633V

【作者名】

千葉

【あらすじ】

おはようございます

「至極どうでもいいことなのかも知れないが。」

ある日の食卓で、僕の前に向かい合わせに座っていた彼は米粒を口に運びながらも何気ない調子でそう切り出した。僕は青菜のお浸しへ伸ばそうとしていた箸を一旦止めて彼の方を見やった。彼はもぐもぐと、米粒を咀嚼していた。

「俺はお前が飯を食う時にそうやって、左肘を机の上に乗せるのがどうも気に食わない。だから、今月一杯でこの家を出ようと思っている。」

彼は相変わらず口をもぐもぐさせながらそう言った。僕は「そうか」と一言だけ言って、お浸しへ箸を伸ばした。そうしてそれを口へ放り込みながら、ちらりと自分の左肘を見た。確かにこれは行儀のいい行為ではないからな。そう思いながらも僕がいまいち納得出来ずにいるのは、きっと当然のことなのではないだろうか。

僕と彼は全くの他人である。近所に住んでいた幼馴染同士でもなく、また学校を媒介にして知り合った同級生というわけでもない。大学に進学するに辺り一人暮らしのための住まいを探していた僕たちは、たまたま不動産屋の軒先で出会ったのである。高すぎる家賃に茫然としていた我々は、住まいを共有するという選択肢を選びとることにより何とか大学に程近い場所に居住することが可能になった。二人とも学校は別々なのだが、キャンパスがとても近い場所にあったのだ。お互い学校とバイトで忙しく、一つ屋根の下に住んでいても顔を合わせるのは朝食時くらいのものだった。狭いながらも寝室が二つあったので、どちらかが部屋に籠っていれば、当然お互

いに顔を合わせるタイミングも無かったのである。

僕たちは一つ屋根の下に暮らすことが決まってから、お互いを知る作業を始めた。幸いなことに音楽や読書の趣味は似通ったものだったので、お互いの主張を潰し合うことなどはせずに済んだ。最初の何日かをそれぞれ思い思いに過ごしたのち、朝食の時間だけはいつも一致することが判明したため、僕たちは毎朝交互に朝食を作ることにした。全く干渉し合わずに生活することも可能だったのだが、何だかそんな味気ないことはどうもしたくなかったのだ。僕たちは毎朝決まった時間に起きて、一緒に朝食を食べた。それはトーストとジャムだったり、お米と卵だったりした。今日の朝食は何だろう、明日の朝食は何にしようなどと思い巡らすのが、僕の小さな楽しみになった。

そんな奇妙な共同生活に僕は大きい満足していたのだが、どうやら彼の方はそうではなかったらしい。その宣言をした日から、彼は少しずつ荷物の整理を始めた。元々持ち物は多くなかったのですが、そう長くはかからなかった。三日もすれば、彼の部屋はきちんと整頓が行き届き、ガムテープで口を閉じられた二つの段ボール箱と、空っぽの机と本棚が残っているだけになった。布団はきちんと畳まれて押入れに収納されているだろう。

日曜の朝、我々は最後の朝食を摂った。当番は僕だった。最後までからといって殊更気合いを入れることもなく、白いお米とみそ汁、それから目玉焼き。そこにカリカリに焼いたベーコンが添えられていた点は、いつもより豪華だったと言えなくはないが。我々はいつものように黙々と箸を口へ運び、食材を咀嚼した。これが我々の共同生活の最後の食事であるが、別に大した感慨も無く、それは全くもっていつもの朝の風景だった。

「短い間だったが、」

斜めがけの大きな鞆を背負いながら、彼は玄関でそう口上を始めた。玄関の壁に凭れ、鞆の肩ひもが彼の肩に食い込むのをぼんやり眺めていた僕は、少し視線を上げて彼の顔を見た。彼はいつものよ

うに表情の乏しい眼で、じつと僕のことを見ていた。

「短い間だったが、君にはとても世話になった。急なことで申し訳ないが、また遊びに来る。」

彼の部屋にある家具は、置いていくことになっていた。彼の新しい部屋がどのような所なのかは知らないが、机も本棚も布団も、必要無いということだった。段ボールに詰めた本と衣料品は、すでに宅配業者に託した後だった。元々彼と家賃を二分することで何とか住むことの叶った部屋である。彼が出て行ってしまつては僕も出ていかざるを得ないかと思われたが、幸いにもすぐに次の入居者が決まつた。僕と同じ大学で、同じ学部学科に通っている友人が、偶然にも一人暮らしを始めるべく物件を探しているという話を聞いたので我が家を斡旋したのである。家具は全て、その新たな同居者が引き継ぐことになっていた。

簡単な挨拶を述べると、彼はくるりと僕に背を向け、玄関の取っ手を握つた。ゆっくりとその手に力が込められ、扉を押しあけて行く。彼は一步この部屋から踏み出した。そして今一度、僕の方を振り返ると、口元に微かな笑みを浮かべた。僕も笑みを返しながら、「元気でな」と手を振つた。

それから二月程が経つ。僕は駅前のスーパーで食糧を買い込んでいた。新しい同居人は自炊をしなかった。包丁もほとんど握つたことがないという。キッチンと風呂、トイレの掃除をそいつの仕事にすることを条件に、僕は朝食係を毎日請け負うことを了解した。時には夕飯も二人分作り、二人で食べる。頼まれれば余り物で弁当も作つてやつた。主婦にでもなつたような気分だった。彼とは正反对で食事の間にもよく喋るやつだった。僕は適当な相槌を打つただけだつ

たが、そいつは殊更不満でもないようだった。僕も別にうるさく感じるようなこともなかったので、食事が一方的に賑やかなことも大して受け入れがたいことではなかった。

明日の朝食は和食にしようと決め、僕は鮮魚のコーナーをふらふらとしていた。朝にそれほど凝ったものを出すことも時間の都合上出来ないから、塩鮭でも買って行こうと思ったのである。僕がじつくりと赤い切り身を検閲していると、背後から「おい」と声を掛けられた。同じように鮭を求めに来た客に邪魔にでも思われたかと苦い気分で振り返ると、そこには彼が立っていた。左手に買い物かごをぶらさげていた。中には様々な野菜が放り込まれている。彼と僕が再会したのは、彼が出て行ったあの日以来のことだった。

「お前か、久しぶりだな」

僕は体の向きを変え、彼の方へ向き直った。彼は相変わらず無表情で、久々の再会にも何の感動も示さなかった。しかし彼が僕のことを背中だけで僕と気付いたうえ、見向きもせずに通り過ぎなかったというのはなかなか嬉しいことだった。僕は今、自分の口元がにやにやと緩んでいるのではないかと心配した。

彼の傍らには、女性が立っていた。白い肌をした、華奢な女性だった。肩の辺りまで伸びた黒い髪は、子供のように細い。何ともか弱そうな女性だった。

「女が居たとは知らなかった」

当人を前に失礼な口のきき方だったが、つい思ったことをそのまま口に出してしまった。彼と女の話をしたことなど一度も無かったし、彼がそのようなことを匂わせたこともなかった。突然部屋を出て行くなどと言い出したのもこの為だったのか、と内心で納得していると、彼はまた、出て行った日のような薄い笑いを口元に浮かべながら首を振った。

「姉だ」

彼が言うと、傍らの女性は小さく頭を下げた。さらりと前髪が揺れた。白い顔に刻まれた表情は、彼が得意にしているのと同じ無表

情だった。確かにそう言われればどことなく似ているような気がしなくもない。

「就職して上京してきたはいが、こっちの暮らしが合わなくて体壊したんだ。料理も掃除も何にも出来ない奴だから、俺が面倒見ることになった」

彼がそう言うのと、彼の姉だというその女性は細めた眼で彼のことを横目に睨んだ。彼は「ほんとのことだろ」とそれを宥めると、ちらりと僕の手にあつた買い物かごに眼をやった。

「明日の朝は何だ？」

「鮭でも焼こうかと思つて」

彼の問いに背後に陳列された切り身を指さしながら答えると、彼は少し思案の表情を浮かべたあと、僕の指した場所とは少し離れた所を指さした。

「今なら鯖が美味しい」

彼の言葉に指の示す方向を見やれば、確かに鯖が陳列されていた。なるほど、ならば明日の朝は鯖にしよう。第一、塩鮭など牛丼チェーンの朝定食でそれなりに美味しいものが安く食えるのだ。あいつにはきつとありがたみが無いに違いない。

「じゃあまた、そのうち遊びに行く」

僕が朝食の予定を修正しているうちに、彼はひらひらと手を振って立ち去ろうとした。体の向きを僕から、向かいの調味料コーナーへと変える。僕は慌てて鯖から眼を離すと、自分のかごに手突っ込んだ。

「おい」

足を止め、再びこちらを向いた彼の手にあつたかごに、自分のかごから取り出したものを投げ入れた。赤い包装紙に包まれた板チョコレートが、ハウレンソウの上でバウンドした。

「たまには甘い物も食え、あとほんとに遊びに来い」

そう一息に言うと、彼はまた口元に微笑を浮かべた。右手を軽く挙げ、僕に背を向けた彼は調味料コーナーへ向かった。半歩後ろに

控えていた彼のお姉さんも、また少し会釈をしてから、彼と同じように僕に背を向けた。

ああそういえば、新しい同居人は魚の骨を上手く取ることができない。明日の朝は少し早めに起こして、朝食の時間をしっかり確保し講釈してやろう。僕はあいつの母親か、それとも妻か。小さくため息を吐きながら、僕は発砲スチロールのトレーに大人しく横たわっている鯖たちの列へ手を伸ばした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4633v/>

同居人の話

2011年8月4日03時27分発行